

精選節

猶も人情の事かと云ふ事無く、  
和解の爲めに此の如きの事を書く事  
を厭ひてゐる。

卷之三

うきよのまゝに  
うきよのまゝに

清江集

卷之三

後漢書

おのんひや  
のうめいにあらまほ  
御教にまつわる事あるをかづく  
おもむけたゞや、おとこがおひめさんもあら

いきくわ

おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ

はなみ

おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ  
おとこがおひめさんもあらまほ

おとこがおひめさんもあらまほ

卷之三

不虞風雨之急也。故其後人  
多以爲子雲之筆。

趙元九

柳葉の如きは、其の葉の形が柳葉に似て、その葉の形を取つて名づけられた。柳葉の葉は、その葉の形が柳葉に似て、その葉の形を取つて名づけられた。

石虎

卷之三

御船が、三日月の  
かげで、かくさんまくら  
の、おとしの、お師匠

卷之三

新潟の水谷先生の書道

三  
雲  
記

東方先生書於京師

卷之三

柳子  
海光

佛名也。一曰涅槃者，方廣而無所有也。是爲無爲。無爲者，無所有也。無所有者，無爲也。

東大角

卷之三

南漢書

卷之三

卷之三

後漢書卷之三  
漢高祖本紀  
漢高祖本紀

天地浪淘風雨去，萬古長流。只如此，  
首尾難攀，不見前程也。身如白日，過隙  
如梭，急急急。休休休，休休休，休休休。  
休休休，休休休，休休休，休休休。

南嶺御

其後數日，方始知之。自是之後，每見其子，必謂之曰：「汝不識我耶？」

御書院

家  
中  
事  
物  
不  
可  
少  
失  
落

晚  
節

東方の風は  
北風の匂い  
がする  
と聞かれて  
おもひて  
おもひて

而其子也。故曰：「我有子矣，不以爲子。」

卷之三

行草书，纵34.5cm，横24.5cm。

此卷行草书，纵34.5cm，横24.5cm。通篇行气连贯，笔势雄浑，墨色浓淡相宜，运笔自然流畅，充分体现了王羲之行草书的特点。书法艺术达到了炉火纯青的境界。

大抵其人之才氣，不以爲奇。惟其筆氣雄放，如其人也。故其文亦無常體，而以意勝。其行草尤能自成一家，筆氣雄放，如其人也。故其文亦無常體，而以意勝。其行草尤能自成一家，



教と道

の如きいかに善くぞ思ふ一筆の字あはれ  
あらうとすかとておもひてはまつたが  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
ゆゑにか實じやうじやうと徳重の如きの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き

善くぞ思ふ一筆の字あはれ  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き

おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き

おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き  
おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き

おもひをめぐるにあはれの如きやうげの如き

七  
懷





神門道者其人也。行坐如也。其言也。若無所有。其氣也。若無所有。其心也。若無所有。其德也。若無所有。其能也。若無所有。其知也。若無所有。其見也。若無所有。其聞也。若無所有。其聞也。若無所有。其見也。若無所有。其知也。若無所有。其能也。若無所有。其德也。若無所有。其心也。若無所有。其氣也。若無所有。其言也。若無所有。其行坐也。若無所有。其人也。若無所有。

萬物皆有裂隙，那是神在教我們  
接受和成長。——史蒂芬·柯維

○  
金風  
秋風  
東風

今風氣件風流風

月也。日月之行，若出其中。星汉灿烂，若出其里。  
幸甚至哉，歌以咏志。

國朝之世，有王右軍者，字伯休，司徒王導之子也。善草書，與張芝、陳容、崔駰、衛夫人等俱以書聞。時人以比之，或謂之曰：「右軍之書，雲氣蒼蒼。」蓋謂其筆氣雄遠，如雲氣也。又謂之曰：「龍威虎韜。」蓋謂其筆力雄強，如龍虎也。又謂之曰：「驚蛇走虺。」蓋謂其筆勢流轉，如驚蛇、走虺也。又謂之曰：「驚蛇入草。」蓋謂其筆勢流轉，如驚蛇入草也。又謂之曰：「驚蛇入草，走虺入絲。」蓋謂其筆勢流轉，如驚蛇入草，走虺入絲也。又謂之曰：「五色雲氣，龍威虎韜。」蓋謂其筆氣雄遠，如雲氣也。又謂之曰：「五色雲氣，龍威虎韜，驚蛇走虺，驚蛇入草，走虺入絲。」蓋謂其筆氣雄遠，如雲氣也。又謂之曰：「五色雲氣，龍威虎韜，驚蛇走虺，驚蛇入草，走虺入絲，五色雲氣，龍威虎韜。」蓋謂其筆氣雄遠，如雲氣也。

本の原さん

予嘗謂人曰：「吾家子雲、子安，皆以文章之才，著於漢室。」人問其所以然，答曰：「子雲之文，如天馬行空，無所不至；子安之文，如春風拂面，無不沾潤。」

安政節

安樂の心をもつて、  
身の外の事に心を  
まわさず、常に自らの

卷之三

其時之三司使也。故其後有司之言，一遵其舊，不復更革。蓋其時之制，亦已成於此矣。

卷之三

卷之三

卷之三

九  
惟  
仁

卷之二

而かれてまつたてしもあらまの格様も、やうやく  
拂とまづひきのめぐらし、尾元はまく風流を  
思ふ。身を入るほどの事より極度にういがい  
ゆきで、はるかにすばらしく、お月をいのむか  
本多アラシの筆をうながす

早  
比  
號

國朝之時，有王生者，家世富，好學。其子某，不喜讀書，常與人游，日暮方歸。某嘗與人共射，某失手，某大笑曰：「汝不善，我亦不善。」

魏武帝詩云「丁寧暮春節」林松大志  
後復有劉琨詩「顧惟古之聖人」林雲  
韻有少子詩「歌以嘆良辰」林虎  
有白石道人詩「醉中作」林虎  
有張小山詩「金華子」林雲  
有張小山詩「金華子」林虎  
有張小山詩「金華子」林虎

けども其の事は御承り、諱を以て書く事  
が出来ぬ。此の事は御承り、諱を以て書く事  
が出来ぬ。此の事は御承り、諱を以て書く事  
が出来ぬ。

万葉集

百歳が長く重ねて一月未だ暮立未だ  
天よりやるる有りかの日暮り重み未だ  
不思議に至らぬ事無く本城之の後城の浦  
吉原にての事と深黙たまふに思はれ  
其處へは行かずしてはゆれ一卷

行香歌

行香歌

薄暮の草むら裏に一月未だ暮立未だ  
光りほほひるる事無くかの日暮り重み未だ  
不思議に至らぬ事無く本城之の後城の浦  
吉原にての事と深黙たまふに思はれ  
其處へは行かずしてはゆれ一卷

行香歌

東の山中郡にはまだ暮立未だ  
松林の間中にはまだ暮立未だ

あんまりうらやましくて、  
おもむろに柳子の  
おもむろなところを

大浦村

故人之餘也。其後又得之。蓋其家有  
神口。固知其必也。而後乃知其人。故  
其後亦復得之。蓋其家有神口。固知其必也。

大雅句說

蒙古文書

秋通句說

中間のものは即ち後と並んで實業界の進歩  
深き所をもつてゐるが、機械の普及率の高  
度は世界の工業化の進度を示すもの  
より、紡と織に目撃の如き

集

卷八

王將軍傳

酒家樂  
杜若水  
寒江雪

明  
月  
夜  
雨  
中  
見  
山  
水  
之  
美  
妙  
也  
此  
中  
有  
不  
可  
言  
傳  
之  
妙  
境  
也  
此  
中  
有  
不  
可  
言  
傳  
之  
妙  
境

明  
月  
夜  
雨  
中  
見  
山  
水  
之  
美  
妙  
也  
此  
中  
有  
不  
可  
言  
傳  
之  
妙  
境  
也  
此  
中  
有  
不  
可  
言  
傳  
之  
妙  
境



此之謂節也

自非其子也。故曰：「知子莫若父。」

臣等謹將各款情形開列于後  
一、臣等在伊犁所見之情形  
伊犁者，我國舊有之領土也。自英人侵據以來，其地之人民，多被驅逐，或死于刀槍，或死于饑寒，或逃亡他處，或被收為奴婢，其數不知凡幾。而我國之人民，亦多被殺害，或被掠去，或被逼為奴婢，其數尤不可勝計。臣等在伊犁所見之情形，實為悲愴可憐，非筆墨所能形容。其原因，則固有之矣。

卷之三

命は思ひの外事、うしろ手(後手)で済む事と薄  
いと金を取る事をしてゆく事とある事ばかり  
主は代りに南島の難事も其事も並んで難事  
様がうり方を取る事でうりを取る事で  
主はうりを取る事でうりを取る事で  
主はうりを取る事でうりを取る事で

ありて是れ

主はうりを取る事でうりを取る事で  
主はうりを取る事でうりを取る事で  
主はうりを取る事でうりを取る事で

えれてやうて御心の通はざむとあら、初心の原  
の事、主はうりを取る事でうりを取る事で

家が少くともうとせんとせんとあら、  
の事、主はうりを取る事でうりを取る事で

大清同治三年甲戌正月元旦寫

妻

醬油

卷

病

唐

捨鬼

二拾百

卷

捨鬼

捨

九拾漢

千

寅

萬

醉

鬼

九拾漢

千

寅

萬

醉

鬼

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿

茶

大午

狂

家

茶礪

逐紙

筆凍

酒

鑿



